

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 アカガレイ

学名 *Hippoglossoides dubius*

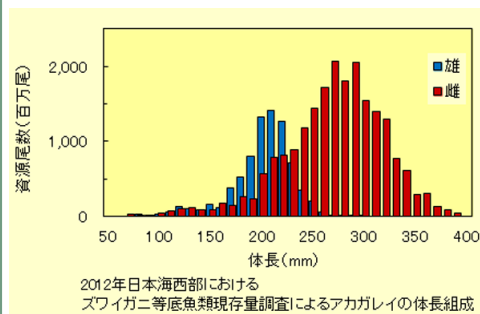
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 20歳
成熟開始年齢: 京都府沖の50%成熟体長は雌25cm、雄17cm
産卵期・産卵場: 2～4月に水深180～200mで産卵、主な産卵場は粟島北方、経ヶ岬西部、隠岐諸島東側等、各地の沖合に局所的に存在
索餌期・索餌場: 周年、分布域全体(水深150～900m)
食性: クモヒトデ類を周年捕食するが、オキアミ類やホタルイカモドキ類などのマイクロネクトンが増えると、それらを選択的に捕食
捕食者: 幼稚魚は不明であるが、成魚の捕食者はいない

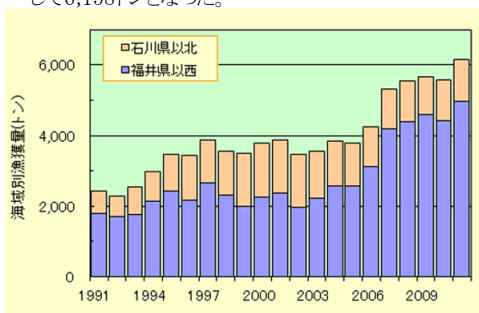


漁業の特徴

日本海のアカガレイの9割以上が底びき網で漁獲され、その他は僅かに刺し網で漁獲される。府県別農林水産統計値のある1991年以降では、沖合底びき網の1そうびき(以下、沖合底びき網と呼ぶ)が全体の4～6割を占めている。例年、鳥取県、兵庫県、福井県、石川県の漁獲量が多い。

漁獲の動向

沖合底びき網の漁獲量は1981年に最高となり、それ以降約10年間減少を続け、1992年に最低となった。1991年から記録のある日本海での総漁獲量も1992年が最低の約2,300トンであった。その後、日本海での総漁獲量では、1990年代後半や2005年前後に顕著に増加し、2007～2010年は5,500トン前後で推移した。そして、2011年はさらに増加して6,158トンとなった。

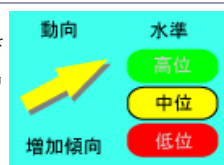


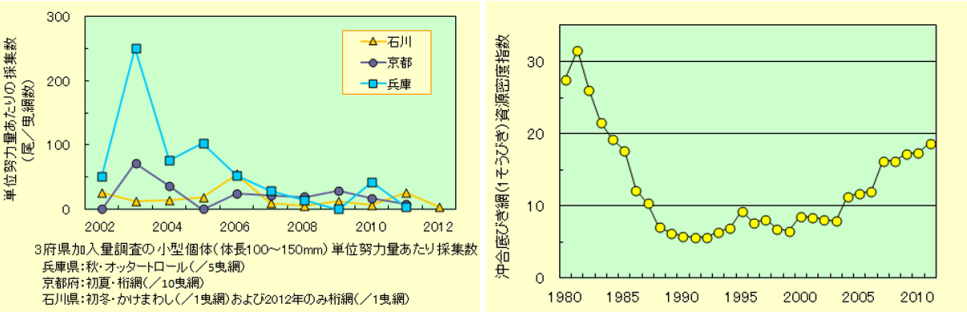
資源評価法

日本海全域における漁獲量と沖合底びき網の漁獲成績報告書から求めた資源密度指数から資源水準を判断した。さらに、ズワイガニ等底魚類現存量調査(5～6月)結果から資源動向および加入状況を、新規加入量調査(石川県、京都府および兵庫県)から卓越年級の出現状況を考察した。水準の判断には沖合底びき網の資源密度指数を用い、過去の最高値を3等分する値の「10」(低位-中位)および「20」(中位-高位)を基準とした。

資源状態

日本海における漁獲量は、2005年ごろから顕著に増加し、2007年以降は5,000トン以上で推移したが、2011年は再び増加して直近5年で最も多い6,158トンであった。沖合底びき網の資源密度指数もほぼ同様に推移した。2004年から10以上となり、2007年以降は16～17で推移し、2011年は近年で最も高い19であった。漁獲量も資源密度指数も2011年は増加しており、直近5年では増加傾向であった。新規加入量調査に基づけば2001年級群に続く卓越年級はまだ認められないが、近年、加入が比較的良好であったことが示唆される。





管理方策

資源水準は中位であり、資源量指標値は2011年にはそれまで数年の傾向（横ばい）とは異なり増加傾向を示した。2001年級の体重成長による資源量の増加がほとんど期待できない。こも関わらず2011年の資源量指標値が増加したことから、卓越年級は確認できないがここ数年の加入は比較的良好であることが想定される。本種では鳥取県の水揚げ全長規制や改良網の普及など小型魚の保護が進みつつある。本種は長寿命であり過度に漁獲が高まることのないよう配慮を続けながら、資源を有効利用するべきである。ABC 算定の規則2-1)によってABC を算定し、資源動向に対応しつつも漁獲量を抑えることとした。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABCLimit	51百トン	$0.8 \cdot C_{2011} \cdot 1.04$	—	—
ABCTarget	41百トン	$0.8 \cdot 0.8 \cdot C_{2011} \cdot 1.04$	—	—

- 100トン未満を四捨五入
- 平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABCLimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCTarget = ABCLimit \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数（標準値の1.0）、bとは資源量指標値の傾きと平均値（直近3年間）である

資源評価のまとめ

- 資源の水準は中位、動向は増加である
- アカガレイは長寿命である
- ここ数年、加入が良好であった可能性はあるものの、2001年級に続く卓越年級は認められていない

管理方策のまとめ

- 水揚げサイズ制限や改良網の使用による小型魚の保護が進みつつある
- 過度に漁獲が高まることのないよう配慮を続けるべき

執筆者：藤原邦浩・上田祐司

資源評価は毎年更新されます。